

# 羽咋市深江遺跡 (第1・2次)

吉崎川河川改良工事関係  
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

1975・3

石川県教育委員会

## 例 言

I 本書は昭和48・49年度に石川県教育委員会が実施した羽咋市吉崎川河川改良工事に伴う緊急発掘調査概要報告書であり、調査費用は石川県土木部河川課が負担した。

II 調査期日 第1次調査 昭和48年9月18日～9月30日  
第2次調査 昭和49年8月12日～9月25日

III 調査指導講師 高堀 勝喜(石川考古学研究会々長)  
浜岡賢太郎(石川考古学研究会代表幹事  
県立七尾工業高校々長)  
中越 照次(石川考古学研究会々員)  
安村 敬学( )  
谷内尾晋司( ) 幹事)  
西野 秀和( ) 〃 )

IV 調査担当者 橋本 澄夫(県教委文化財保護課係長  
現、県立中央高校教諭)  
越野 兵司(県教委文化財保護課主事  
現、県立羽咋高校教諭)  
高橋 裕(県教委文化財保護課主事)  
塚野 秀章( ) 嘱託)

調査協力 羽咋市深江町・兵庫町、金沢市稚日野町有志  
中田 晴彦(日本大学学生)  
東山 和博(大阪歯科大学学生)

V 本書の写真撮影・図版作成・原稿執筆・編集は高橋があたった。

# 羽咋市深江遺跡

## I 位置と環境

羽咋市深江遺跡は、羽咋市の東方約2kmの深江町地内に所在する。遺跡は邑知潟に注ぐ吉崎川の右岸に広がる邑知地溝帯上に位置するが、現邑知潟畔までの距離は北方約2kmを測る。現在水田になっているこの辺りは、標高は約2.5mを測るが、遺跡東方は幅約3kmの地溝平地を経て、富山県氷見地方へ続く山地地形となっている。また、北東約3kmには志賀町・鳥屋町へと続く丘陵（眉丈山系）が帯状に広がっている。



第1図 遺跡付近の地形図

(1 : 50000)

- |              |             |              |                |
|--------------|-------------|--------------|----------------|
| ① 深江遺跡       | ⑥ 子雨川遺跡     | ⑪ 杉野屋むつばかり遺跡 | ⑫ 飯山小学校横穴(1-3) |
| ② 次場遺跡       | ⑦ 長者川遺跡     | ⑫ 杉野屋遺跡      | ⑬ 福永仏教遺跡       |
| ③ 釜屋・新保・猫目遺跡 | ⑧ 子雨川南遺跡    | ⑬ 中川中世寺院跡    |                |
| ④ 農業倉庫前遺跡    | ⑨ 菅原横穴(1-3) | ⑭ 中川遺跡       |                |
| ⑤ 羽咋大塚古墳     | ⑩ 杉野屋あかさか遺跡 | ⑮ 飯山戦場ヶ端遺跡   |                |

本遺跡の周辺には、地溝帯低湿地に立地する原始・古代の遺跡が分布するが、特に弥生時代後半の遺跡が多く、古墳時代に至って当該地方における古墳群を形成させる社会的背景をなすものと考えられる。本遺跡周辺を概見すれば、西方約1.5kmには弥生時代終末の土器(次場上層式)多

量と、これに伴った小形仿製内行花文鏡を検出した、県内有数の弥生遺跡である次場遺跡、柳田・猫目・新保・釜谷地区にまたがる同期の遺跡群があり、昭和48年に新らしく発見された羽咋市農業倉庫前遺跡も至近距離に所在するが、それぞれ少量の弥生式土器も検出している。また、南西方には、多量の弥生時代の遺物が検出された子甫川遺跡・長者川遺跡が分布している。南方には、昭和49年度に石川県教育委員会が緊急調査を実施した弥生～奈良・平安時代の杉野屋ムツバカリA・B・C遺跡があり、東方に連なる山地々帯には、横穴墳を中心に数多くの遺跡が分布している。

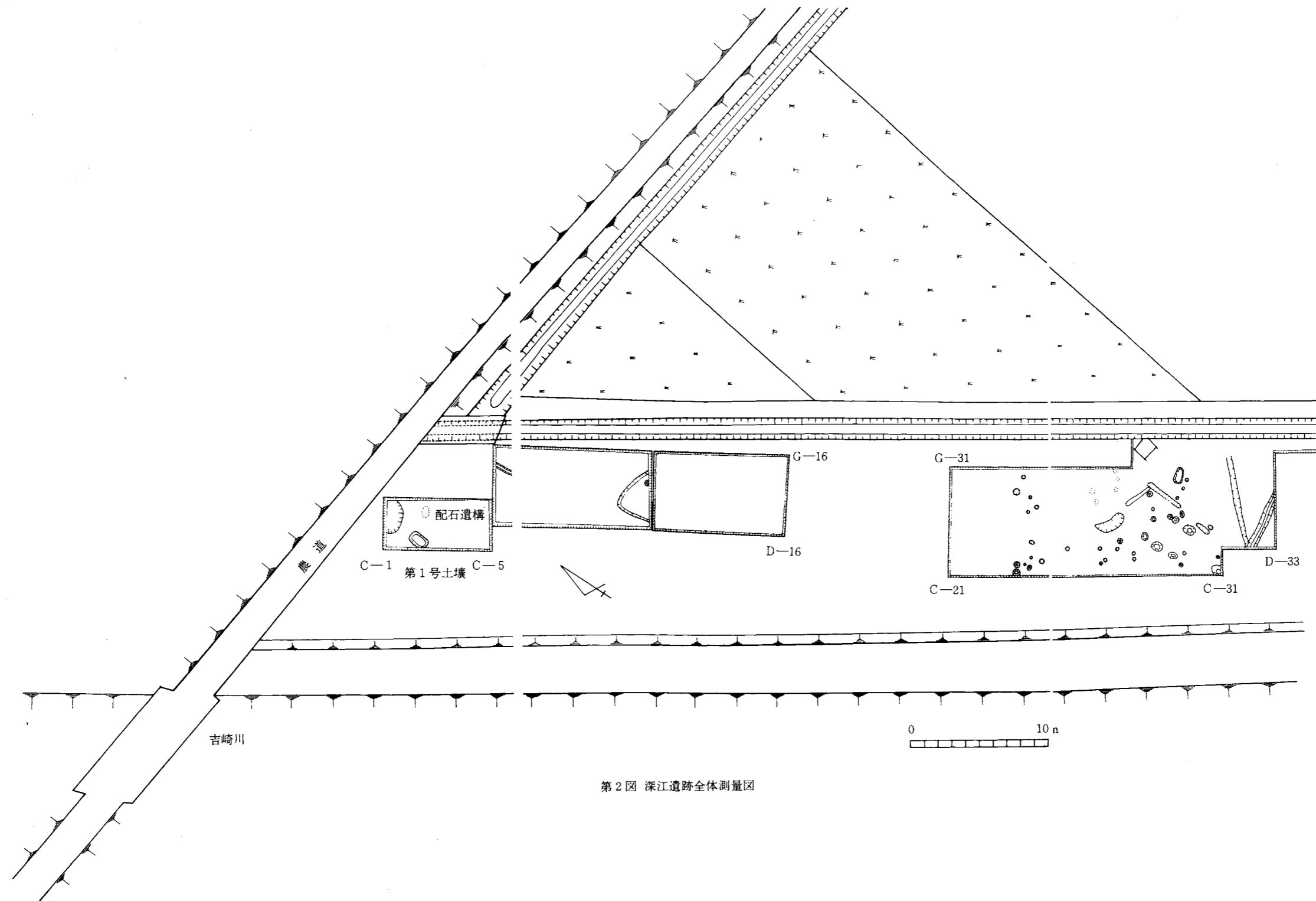
## II 調査経過

本遺跡発見の契機となったのは、邑知瀉へ注ぐ吉崎川の河川改良工事であり、石川考古学研究会々員中越照次氏（羽咋市兵庫町在住）の入念なパトロールによって発見されたものである（昭和48・春）。中越氏よりの連絡を受けた文化財保護課は、橋本澄夫文化財係長（現在県立中央高校教諭）を現地確認に派遣、奈良・平安時代の遺跡であることを確認し、県土木部河川課に対し工事中止を申し入れ、今後の処置について協議を行なったものである。その結果、昭和48年度工事のうち、農道に連なる架橋工事については工事の延期が困難であったため、昭和48年度中に緊急調査を行うこととし（第1次調査）、他の部分については昭和49年度に行う（第2次調査）ことで双方の了解が得られた。調査は付近の水はけが悪いため、渇水期を選び、第1次調査は昭和48年9月18日から9月30日までの延べ13日間にわたり、架橋工事によって破壊される約200㎡について行った。また、第2次調査は昭和49年8月12日から9月25日までの延べ29日間（途中農繁期のため作業休止）にわたり約500㎡について行ったのである。遺構の検出はいずれも2×2mのグリッド法によった。

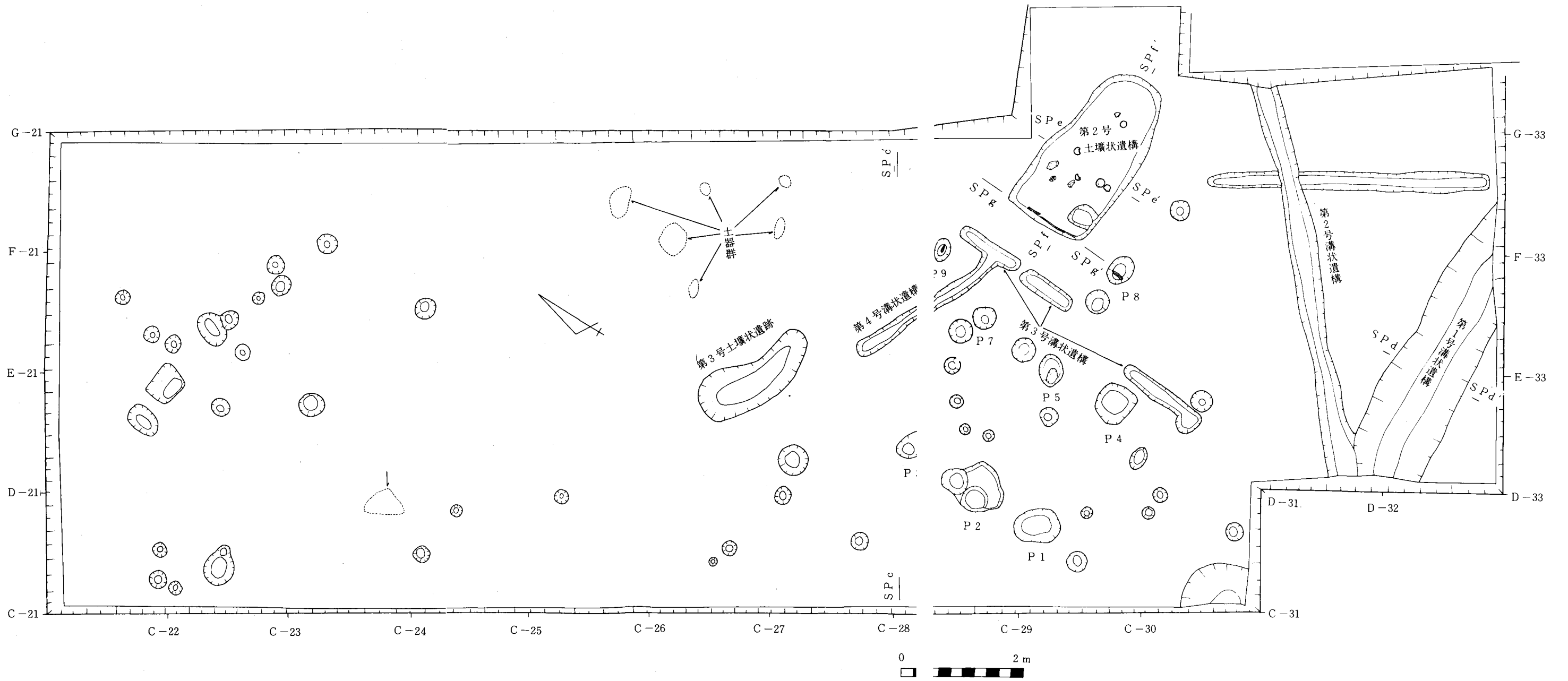
なお、第1次調査と並行して行った分布調査によって、吉崎川の左岸では、遺物包含層の分布は認められず、遺跡右岸にのみ広がっているものと想定された。また、中越氏の調査によって、農道の南方約35～40mの地点に井戸跡の存在も確認されていたため、第2次調査ではこの井戸跡検出も含めて作業を進めることとした。

## III 遺 構

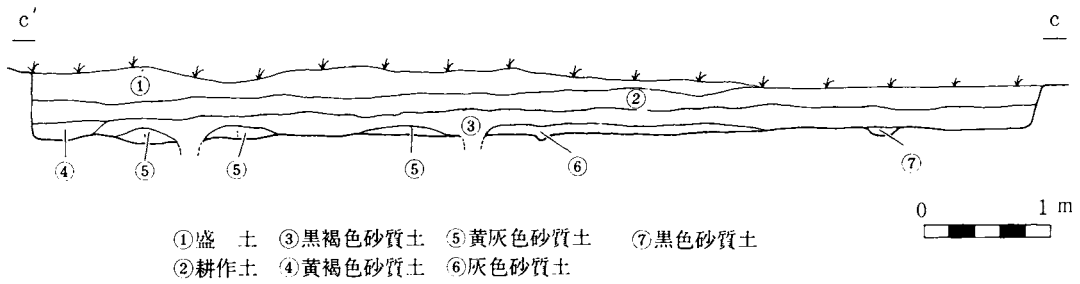
深江遺跡は邑知地溝帯の一角を占める低湿地に立地するため、湧水が著しく、さらに、遺物包含層（黒褐色砂質土）と地山層が砂質土壌であったため、遺構検出とその保存が難行し、調査としては条件の悪いものとなった。検出された遺構は、第1次調査で土壇状遺構と小規模な配石遺構・住居跡・溝状遺構が、第2次調査では井戸跡・土壇状遺構・溝状遺構の他にピット群があった。以下、遺構別にその概略を述べたい。



第2図 深江遺跡全体測量図



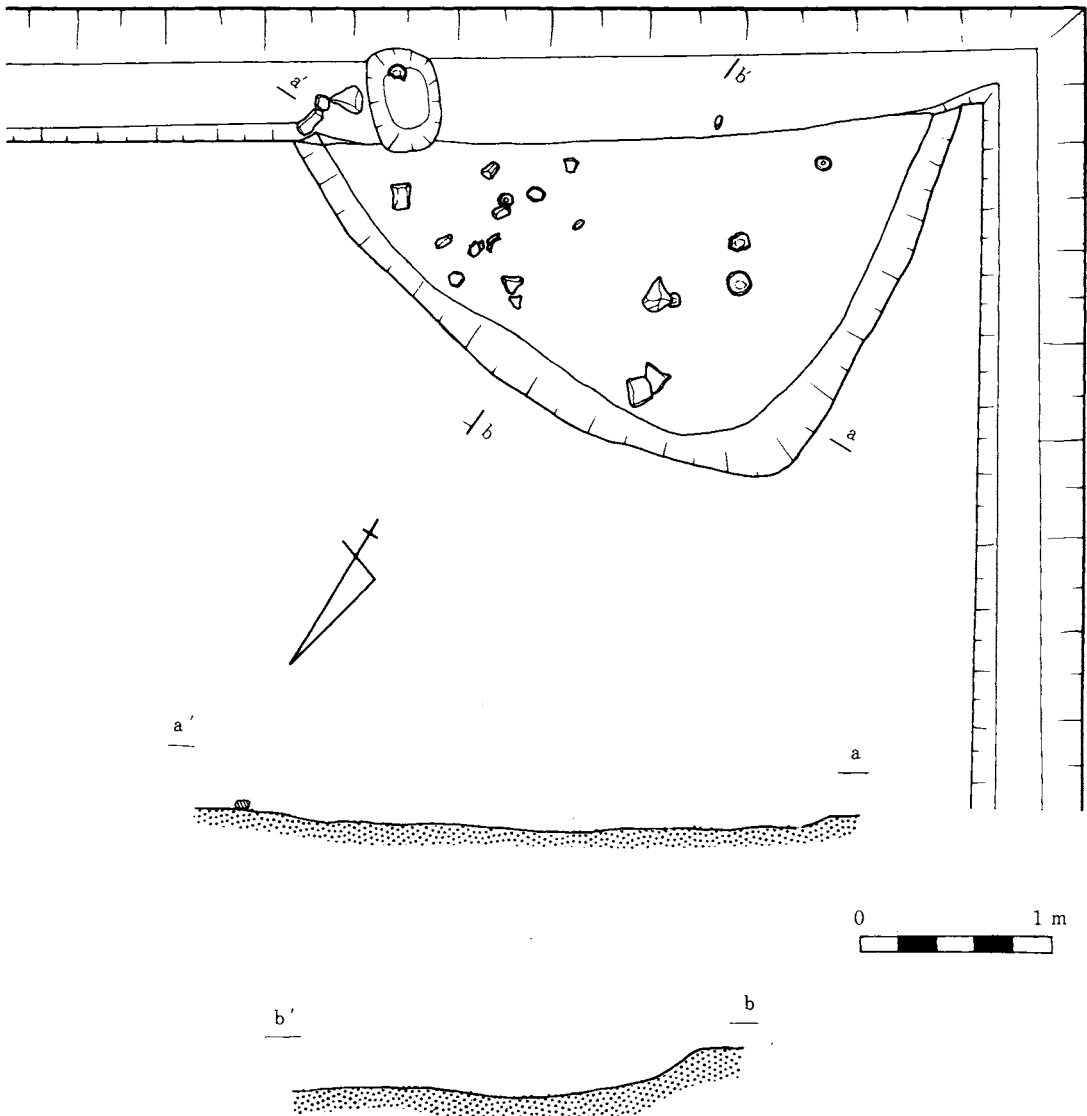
第3图 深江遺跡遺構配置図



第4図 深江遺跡28line土層断面図

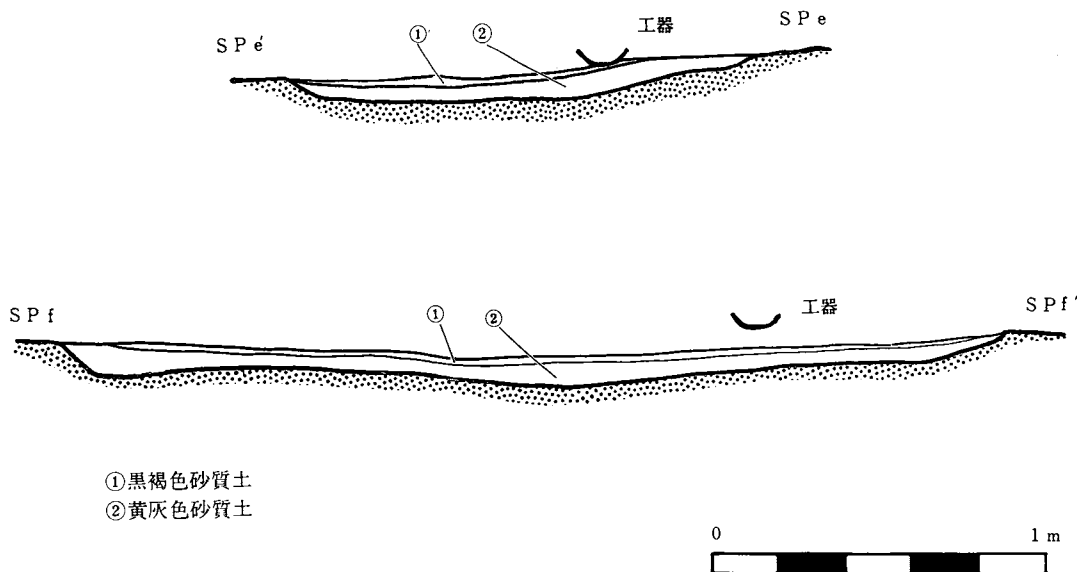
竪穴式住居跡（第5図参照）

第1次調査D-10・E-10区を北西隅の部分のみを検出していた。しかし、第2次調査では、出水が激しく、残り南側部分の検出を残念ながらあきらめざるを得なかった。現存する遺構は、



第5図 D・E-10区竪穴住居跡実測図

北西隅より東へ3.0m、南へ2.2mを測り、壁高は北壁で10cm前後、西壁で5cm前後を残す。住居跡内北東部には、55×35cmの長方形ピットが認められ、ピット内から土師器片を検出している。また、住居跡内充土より須恵器片と土師器碗破片や土錘などが検出された。



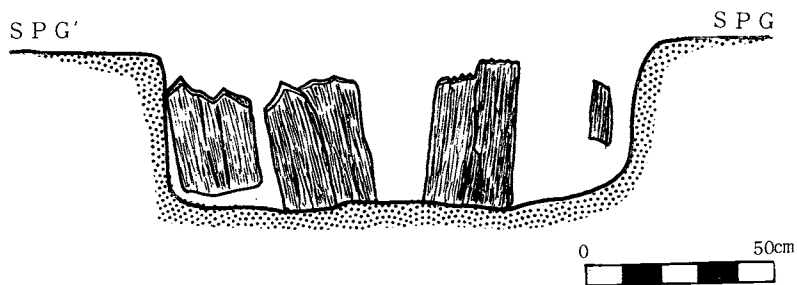
第6図 深江遺跡F-30区土壌状遺構断面図

第1号土壌（第2図参照）

C-2区で検出されたもので、主軸は北を指向する。平面規模は、1.4×0.9mの長方形プランをなし、地山をほぼ垂直に約30cm掘り込んでいたが、出土遺物はなかった。

第2号土壌（第3・6・7図参照）

F-30・G-30区で検出した。主軸は東西に置く。規模は東西2.95m、南北1.5mを測り、東壁はやや円味をもつ。南西隅には40×35cmの方形ピットが認められ、土壌底面からの深さは17.5cmを測った。西壁には幅20cm、厚さ0.8~1.0cm、現存長40cmを計る木板が矢板状に並べられている（第7図参照）。壁は5~10cm程度を残すが、充土内からは須恵器坏身・土師器坏身などがほぼ完形で出土している。



第7図 第2号土壌矢板列断面図

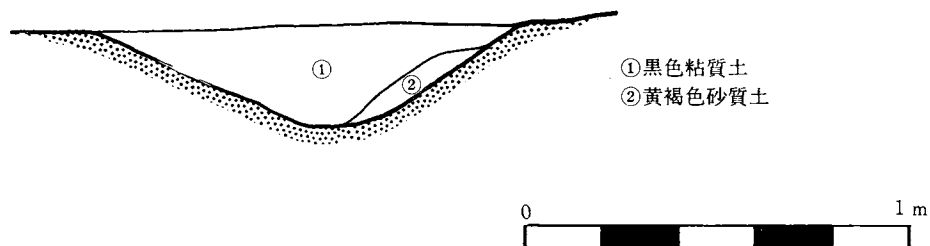


### 第3号土壌（第3図参照）

D-29区で検出。主軸線は東西にあり長さ2.1m、南北0.8～0.9m、深さ5～8cmを測った。本遺構は残存状態がきわめて悪く、土壌と断定できず、その性格も明確にできなかった、出土遺物もなかった。

### 第1溝状遺構（第3・8図参照）

調査区南端D-33・E-33区で検出した東西方向に延びる溝である。上端幅75cm、下端幅30cm、深さ26cmを測るが、充土は黑色粘質土の単一土層で、充土中からの出土遺物は認められなかった。



第8図 D・E-33区溝状遺構断面図

### 第2溝状遺構（第3図参照）

D-32からG-32区すなわち北東から南西方向に延びる溝で、D-32区で第1溝状遺構と交わるが、新旧関係は確認できなかった。上端幅40cm、下端幅15cm、深さ5～10cmを測る。

### 第3溝状遺構

D-31・E-30・F-29区で検出したもので、南北に約5mの長さを測る。上端幅30cm、下端幅約15cm深さ5cm前後を測る。

### 第4溝状遺構（第3図参照）

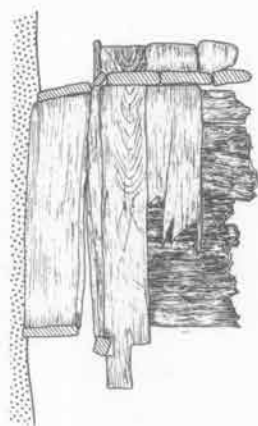
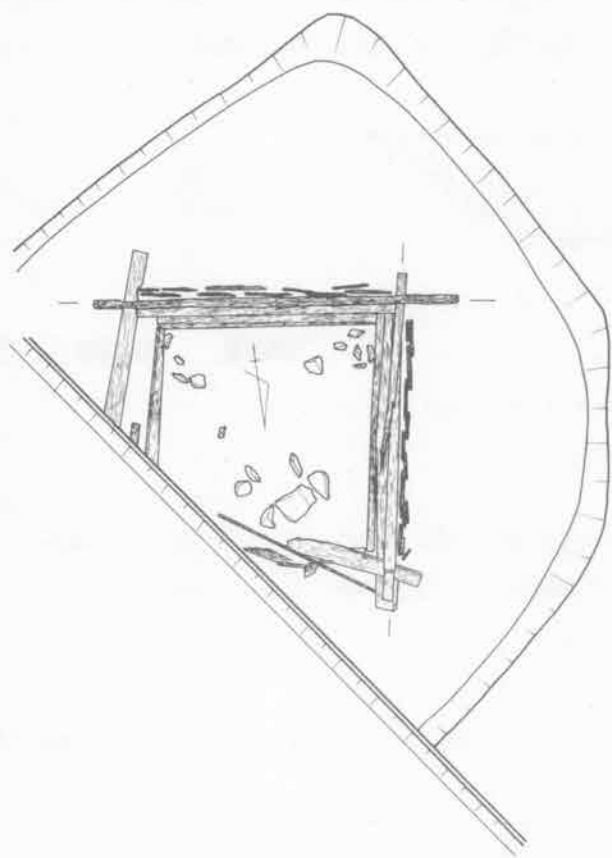
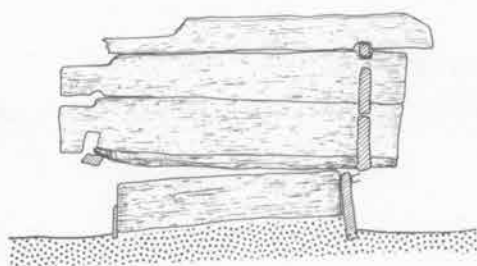
E-29区で検出したもので、第3溝の北端より南へ50cmの地点から、第3溝にほぼ直交してさらに約2.5m西方へ延びている。溝の計測値は第3溝とほぼ同様である。

### ピット群（第3図参照）

第1次・2次調査を通じて径60cmから20cm前後を測るものが約60個検出された。しかし、その配置にはほとんど規則性が認められず、わずかに第3図に示したP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>が第3溝状遺構との位置関係から高床式(?)建造物の柱列痕となる可能性があるにとどまる。なお、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>には、木柱根らしきものが残っていた。

### 井戸跡（第9図参照）

G-29区で検出。内径1辺1.0mを測る正方形プランを呈する。井戸枠の残存高は90cmを測る



第9図 G-29区井戸跡実測図

が、第1段目は長さ90cm、幅20cm、厚さ5cmの板を置き、第2～4段には長さ1.35m、幅20cm、厚さ5cmの板にはぞを切って組合せている。第1段目と第2段目の間には、長さ1.35m、幅10cm、厚さ4cmの板をはさんでいる。さらに組合せた枠の周囲を、幅10～20cm、厚さ2～3cmの矢板で2重に囲んでいる。井戸底には小礫が敷きつめられさらにその上には、ハマグリとシジミからなるそれぞれ厚さ10～15cmの貝殻層が堆積していた。また、井戸内からは、須恵器環・土師器碗・獣角・下駄・有孔石製品などが出土している。なお、北側と東側の側板は、排水路工事によって破壊されていた。

## IV 遺物

第1次・第2次調査を通じて、多量の遺物が出土しているが、それらの大部分は、第4図に示した黒褐色砂質土層からの出土であった。遺構と密接な関係をもって出土したものとしては、第10図1～16に示した井戸内から出土した一括遺物と第11図17～20に示した第2号土壌充土中からの出土遺物があるにすぎない。以下、一括遺物を中心にしてその概略を述べたい。

### 井戸跡内出土遺物（第10図1～16）

出土遺物の大部分は土師器碗であり、他に須恵器坏・鹿角・土錘・有孔石製品がそれぞれ各1点あり、木製品とし下駄断片1点も出土している。

#### (1) 土師器

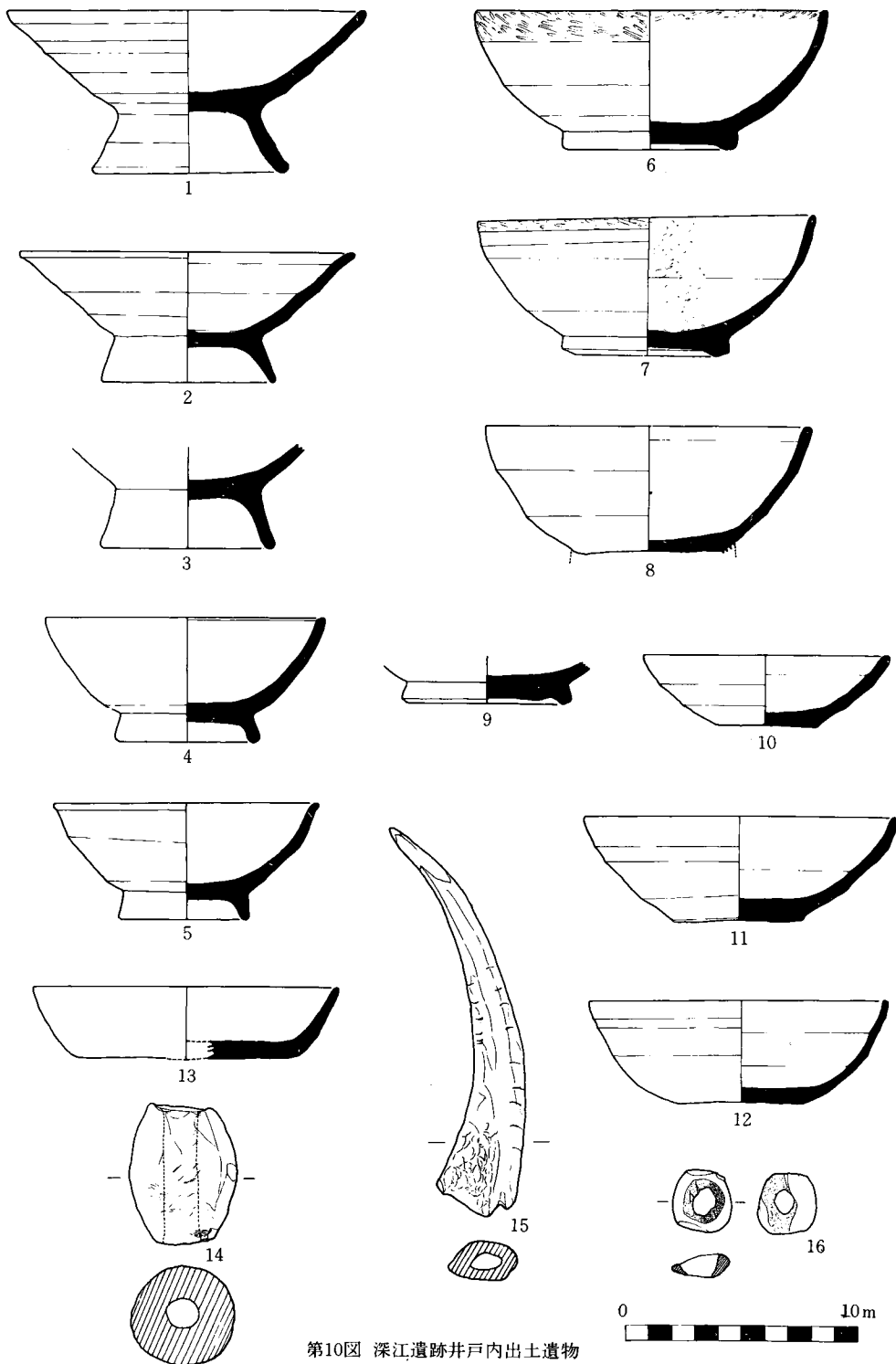
A I類（1～3） 1は口径15.5cm、器高7.0cmを計る大形の台付碗で、胎土・焼成ともに良好である、器壁は入念に調整されている。高台は貼り付けてあり、底部には糸切り痕を残す。2は口径14.5cm、器高5.8cmを計る。胎土・焼成ともに良好で、器壁の調整も入念にされている。高台は貼り付けて底部に糸切痕を残す。3は高台部分だけだったが、高台部径からみて2とほぼ同じ口径のものとして推定される。A I類は、いずれも高い高台を貼りつけて、器壁も入念な横ナデにより調整している。色調はいずれも茶褐色を呈する。

A II類（4～5） 4は口径12.0cm、器高5.5cmを計る。胎土には微砂粒を含むが焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し、器壁は丹念に調整している。貼り付け高台は高さ0.9cmを計り、底部には糸切痕を残す。5は口径11.4cm、器高5.2cmを計る。色調は茶褐色を帯び、胎土・焼成ともに良好である。A II類は、A I類よりも全体的にやや小形となり、器形も底部から口縁部にかけて半球形にふくらむ。

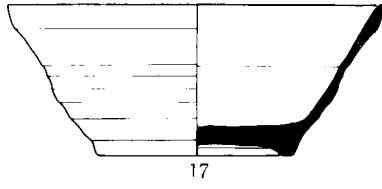
A III類（6～9） 6は口径15.2cm、器高6.0cmを計る。胎土・焼成ともに非常に良好で内外面の口縁部にはヘラによる削磨痕を残す。内面は漆黒色を呈し、よく研磨されている。外面は横ナデによって調整され、底部には糸切痕を残し、高さ0.7cmの低い高台が付く、器形的にはA II類と同様半球形にふくらむ器体となる。外面色調は暗緑灰色を呈する。7は口径14.5cm、器高6.0cmを計り、6と同様底部から口縁部にかけては半球形にふくらむ器形となるが、6に比べて、器壁を薄く仕上げられており、厚さは0.2cmを計る。内面は漆黒色を呈し入念に研磨されており外面は暗緑灰色を呈する。8は高台部分が欠損しており、6、7に比べて口縁端部がやや厚くなる。口径14.0cmを計る。A III類はいずれも内面が漆黒色を帯びよく研磨されたもので、ほぼ垂直に下がる底の高台を持ち、底部には糸切痕をとどめている。

B I類（10～13） 10は、口径10.5cm、器高3.0cmを計る。底部には糸切痕を残す。胎土・焼成ともに良好で色調は茶褐色を呈する。内外面とも横ナデによって、丹念に仕上げられている。11は口径13.4cm、器高4.5cmを計り、底部は平底となる。下部を突出させた台底状に作っており、糸切痕を明瞭に残す。色調は赤褐色を帯びるが、胎土・焼成ともに良好である。口縁部はやや内彎

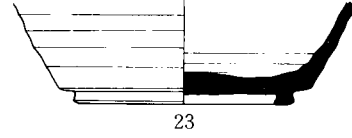
し、器壁内外面とも入念に横ナデ調整を施している。12は口径12.8cm、器高4.5cmを計る。胎土には砂粒を含むが焼成は良好で、赤褐色を呈する。底部は平底で、糸切痕を残す。外面は横ナデによって調整され、内面は黒色研磨されている。



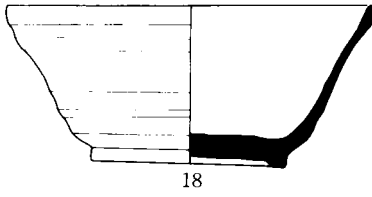
第10図 深江遺跡井戸内出土遺物



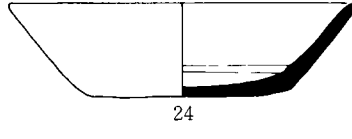
17



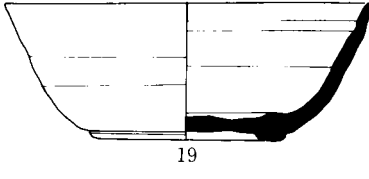
23



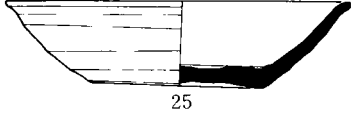
18



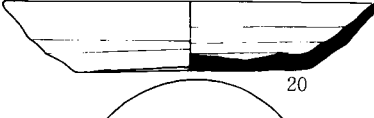
24



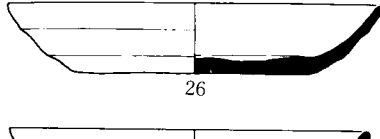
19



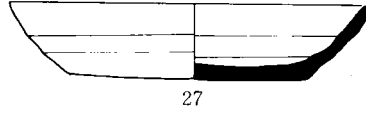
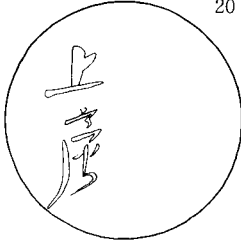
25



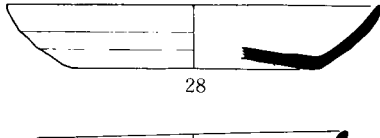
20



26



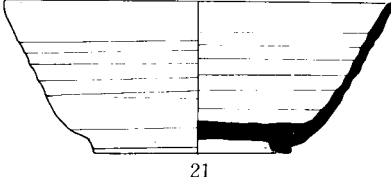
27



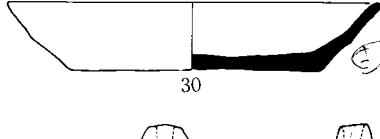
28



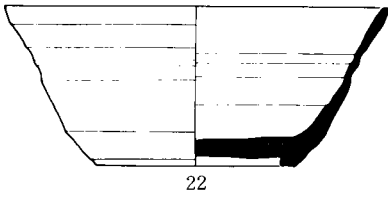
29



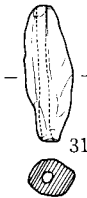
21



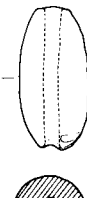
30



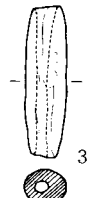
22



31



32



33



34



第11図 深江遺跡出土遺物

## (2) 須恵器

図示した13,1点が検出された。復元形で口径13.1cm、器高3.1cmを計り、胎土には微砂粒を含むが、焼成は良好で青灰色を呈する。器壁は内外面とも横ナデ調整が行なわれ、底部はヘラ切りである。

## (3) 土 錘

14に図示したように、長さ6.0cm断面正円形をなす土錘で、本遺跡出土中では大形品に属する。

## (4) 獣 角

第10図15に示したもので、鹿角と考えられる。基部には加工痕らしきものを認めたが、その用途・性格などについては不明である。

## (5) 有孔石製品

16に図示したもので、上端と下端を水平に切り落とし研磨している。幅2.6cm、厚さ0.9～1.0cmを計り、中央部でやや丸味をもつ。孔は片方から穿っており、上端で1.8cm、下端で0.8cmを計る。石質は、青緑色を呈する凝灰岩質の軟質材である。用途やその性格については不明であるが、井戸を廃棄するにあたり投入された祭祀的・呪術的遺物である可能性も考えている。

## 第2号土壇充土内出土土器（第11図）

本遺構充土内からは、須恵器坏5点・土師器坏2点が出土している。第11図17～20に示したものがそれで、20は墨書土器である。17・18・19は高台付のもので、いずれも胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。器面には水引きによる起伏が顕著である。高台はいずれも低く、内傾するものやや外反するものが認められる。20は墨書土器で、口径14.6cm、器高3.6cmを計る。器面には水引きによる起伏が認められ、底部に「上□」と墨書されている。下の字については墨が薄れ判読し難いが、吉岡康暢氏によれば「廬（キン）」の可能性が強いとのことであり、字義は“小さな家、”という意であるから、井戸の覆屋あるいは、付近の小家屋を指したものと推定される。しかし、字体は薄く、またかなりくずされたものであり、断定は避けておきたい。

21～22・24～28はF-30～32区から出土した須恵器であり、29・30は土師器である。なお、34はF-31E出土の灰釉陶質土器であるが、第1・2次調査を通じて唯一の出土例であった。

## V ま と め

本遺跡は、現吉崎川右岸に広範な拡がりをもつ集落跡であり、第1次・2次調査で発掘したのは、河川改修工事に係るその極く一部にすぎなかった。したがって、集落跡の全容を明かにするにはいたらなかった。しかし、井戸跡・土壇状遺構・ピット群などの遺構とともに、土器を中心とするかなりの遺物が検出され、年代や生活用具の一端を知ることができた。

当遺跡において検出された諸遺構には、方位的にみて一つの規則性を認めることができる。すなわち、井戸跡・竪穴住居跡・ピット群P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>・第3溝状遺構は、それぞれその主軸をほぼ南

北に置いており、第1溝状遺構と第2号土壇は、東西にその方位を置いている。また、調査区全域にわたって、土師器・須恵器の供膳・貯蔵両形態があり、竪穴住居跡や柱穴列と思われるピットとそれに付加された雨落溝とみられる第3溝状遺構が存在している。さらに、井戸跡も発見されていることからみて、かなりの規模の集落が存在したは疑えない。また、灰釉陶器、「上廬」と書かれたらしい墨書土器の出土も注目される。特に、後者の場合、字義解釈によっては、本遺跡の性格究明上、何らかの手掛りを得ることもあると期待される。

出土土器については、井戸内出土の埴形土器は4形態に分類することができ、当時の供膳具の組合せが1・4・6・11よっていただけでなく、これらの土器は、その出土例が松任市三浦遺跡、小松市古府シノマチ遺跡などにみられるものであり、内面黒色土器が出土土器の約半数を占めていることなどからみて平安後期ごろに比定できると考えている。また、第12図に示した須恵器については、その類例を小松市津第4号窯に求めることができ、同じく平安後期の年代があたえられよう。なお、井戸内出土の須恵器13については、これらよりも時期的に古い様相を呈しており、奈良・平安期の土器編年によるII期末に該当すると考えられる。

調査にあたっては、羽咋市深江町・兵庫町、金沢市稚日野町有志の御協力を得たが、特に、羽咋市教育委員会からは、作業員を朝夕にわたって送迎して頂くなど多大の厚意を得ているので、末尾ながら感謝の意を表したい。

註1 橋本 澄夫 「羽咋市史原始・古代編『次場遺跡』」 羽咋市（昭和48年刊）

註2 浅野 幸雄 「羽咋市史原始・古代編『長者川遺跡』」 羽咋市（昭和48年刊）

註3 昭和49年度に石川県教育委員会が、緊急調査を行ない、弥生時代後期の井戸跡や奈良平安期の遺物を検出した。昭和50年3月にその概要が報告される予定である。

註3 吉岡 康暢 他「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会（昭和42年刊）

註5 橋本澄夫・小村 茂 「小松市古府しのまち遺跡」 石川県教育委員会（昭和49年刊）

図版Ⅹ 1～8、図版Ⅺ 9～10、図版Ⅻ 17、18の左下は井戸跡内出土遺物。図版Ⅻ 11～14は第2号土壇状遺構内出土須恵器。14～15はG33区出土須恵器である。



遺跡近影（北方より）



Fトレンチ遺物出土状態（北方より）





C-2区第1号土壇状遺構（北方より）



D・E-10区竪穴住居跡（東方より）



D-G-21区 付近のピット群 (北方より)



D-G-21区 付近ピット群 拡大図 (北方より)



C～G—27～88区付近のピット群（西方より）



調査終了時の全影（南方より）



D—2区出土配石遺構



竪穴住居跡内遺物出土状態





Fトレンナ遺物出土状態



同 上



第2号土壇状遺構（北方より）



同上拡大図



井戸跡全影（西方より）



同 上（東方より）



第2号土壙状遺構北端欠板



木柱痕を残すピット





1



5



2



6



3



7



4



8



9



13



10



14



11



15



12



16

9~10 井戸内出土土師器  
11~13 第2号土壇状遺構充工内出土須恵器  
14~16 F-33区出土須恵器



17

井戸内出土鹿角

18

土 錘  
(左下井土内出土)

羽咋市深江遺跡(第1・2次)  
吉崎川河川改良工事関係埋蔵文化財発  
掘調査概報

昭和50年3月20日 印刷

昭和50年3月31日 発行

編集 石川県教育委員会文化財保護課

発行 石川県教育委員会

印刷所 中川大正印刷(株)